



マーテルランク「夢の研究」の謎：未知の世界との 交感

岩本，和子

(Citation)

国際文化学研究：神戸大学大学院国際文化学研究科紀要, 48:17*-48*

(Issue Date)

2017-07

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81009885>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009885>



マーテルランク「夢の研究」の謎 —未知の世界との交感—

岩 本 和 子

0. はじめに

ベルギーを代表する作家マーテルランク (Maurice Maeterlinck, 1862-1949) の初期の短篇「夢の研究 Onirologie」は、タイトルが示すように夢に関する科学的考察の装いを纏いながら、幻想性や神秘的な雰囲気と「謎」に満ちた不可解なテキストである。初出は1889年6月(26歳)で、パリの『総合雑誌 *La Revue générale*』第49巻に掲載された。その3年前にパリの『プレイヤード *Pléiade*』誌に初めて発表した「幼児虐殺 *Le Massacre des innocents*」が16世紀フランドルの画家ブリュゲル(父)の同タイトルの絵画の言語化を試みたレアリズムの傾向の作品だったのに対し¹、「夢の研究」は神秘や夢、人間精神の内面などに関心を寄せ、不可視のもの、未知のものを言語化しようとする、過渡的なテキストだったと考えられる。事実、同じ1889年には詩集『温室 *Serres chaudes*』を出版し、重要な芸術潮流となる象徴派の詩人として世に知られていくことになる。さらに同年、やはり象徴主義的戯曲の出発点とされる『マレーヌ姫 *La Princesse Maleine*』も出版し、パリの『フィガロ *Le Figaro*』紙上で文芸批評家オクターヴ・ミルボーによって「シェークスピアの再来」とまで絶賛される。散文テキスト「夢の研究」には、マーテルランクが本格的に作家活動を始める時期の思想が投影されているのである。この作品は初出時の肩書は「試論 *essai*」であったが、1918年に「幼児虐殺」と一緒に『二つの物語 *Deux contes*』とジャンルを変え、パリのクレ社から出版された。ちなみに1985年には短篇小説やエッセーの初版テキストを集めた『夢の心理学 / 序説』に収録される。このようなエクリチュールの変化の背景には何があったのか？

ヴィリエ・ド・リラダンやノヴァーリスなどに心酔し魂や精神に目を向け始

めたこの時期、最大の影響を受けたのは13世紀フランドルの神秘主義者ロイスブルック Jan Van Ruysbroeck の発見だった。不可視のもの、神秘的で内的な(神の)力によって人間存在は純化・進歩するという思想にマーテルランクは導かれ、1885年12月24日、友人R.ダルゼンスへの手紙にこう書いている。「僕は見つけた。13世紀の(ほぼ)隠者で神秘主義者のフランドル人、ロイスブルックだ。フラマン語[オランダ語に近い地方言語]テキストを古い不正確なラテン語にしたいくつかの断章を、エルネスト・エロがさらに途轍もなくひどいフランス語に訳している。で、僕は元の本物のフラマン語テキストを見つけたんだ²⁾。」

それは『霊的婚姻の飾り *L'Ornement des noces spirituelles*』の断章だった。人間の精神生活を3段階に分け、外的な行動的生活、内的な感情的生活、そして瞑想生活へと至る³⁾。マーテルランクは1885年から1888年に自身でフラマン語からフランス語への翻訳に没頭して『総合雑誌』に投稿、その後1891年にはブリュッセルのラコンブレ社から出版もしている。「神秘主義者たちが書いたものは、人間性という驚異的な宝の中でも最も純粋なダイヤモンドである」という信念に基づく「長年の労作であった。断章的な「すべてを語りつくさない」文体も確立していくのがこの時期なのである。

「夢の研究」は、「僕」が自身の夢、幼少期の記憶や体験を一人称で語る自伝的な物語として始まる。「僕」は、幼い頃両親を亡くしてアメリカの孤児院で育つが、ふとしたことがきっかけで幼少期の記憶につながる不思議な夢を見る。やがてオランダへの旅で「謎」が少しずつ解かれていくというもので、抑圧された潜在意識、幼年期の原体験の探求である。フロイトの精神分析が広く世に知られるのはもう少し先だが、心理学や脳の働きに関する最新の科学的知識を取り入れながら語り手は謎解きを試みる。しかし、その探求の先には、あるいは探求と共に、さらに数々の謎が生じる。本稿では、作家のメモや言説、外的資料、先行研究などを参考にしつつそれらの「謎」の意味を考え、解明を試みる。それを通してマーテルランクの思想やエクリチュールの特徴を考察してみたい。

まずは「物語」内ではほぼ解決されたと見える幼少時代の夢と記憶の関係につ

いて、科学知識の援用による謎の解明のストーリーを追っておく。次に、テキスト内では明かされることのない、W.K夫人とその親族が「誰なのか」の解明を試みる。ここでは幻想的で不可思議な世界に係ることになる。最後に、語り手＝僕のアイデンティティと、フランス語で書かれたテキストを支えるマーテルランク自身の「声」の関係に注目してみる。以上を通して、ベルギー文学としての「夢の研究」の特殊性・重要性を浮彫りにしたいと思う。

Ⅰ 夢と記憶 一解明された(?) 謎一

前述のように、「夢の研究」は科学的考察の装いを纏いつつ、「現在」20代半ばと思われる「僕」が自らの出自と過去の記憶を掘り起し詳細な日時を織り交ぜて語るという、自伝的な物語の形をとる。その「過去の解明の物語」を本章では追っておこう。マサチューセッツの孤児院で育った「僕」が18歳の頃、院の許可を得て、自分と同じく「孤独で悲しみに打ちひしがれた」親友ウォルターと一緒に、ボストン近郊の彼の叔母の別荘に行きしばらく滞在する。叔母W.K夫人の「母親のようなもてなしと周囲の人たちにも勧められて」阿片を喫むようになっていたある10月の夜に不思議な夢を見る。その日の夕方、W.K夫人の一人娘であるアニーとの間に起こった出来事と関連するのはと「僕」は気づき、それを次のように振り返る。

その日僕はアニーと一緒に(……)庭の奥まで行ったのだった。そこには古い、深くて暗い森があった。冒険の数々が期待できそうな相当古い森で、僕たちはよくここでひそひそと話し込んでいた。色とりどりの絹糸のように森に散らばる遠くからの音楽を追いかけて行き、僕たちは腰を下ろした⁵。(p.27 / p.8)

色彩と音楽の比喩に満ちた描写は、僕からアニーへの深い想いが風景に投影されたものとも考えることもできるが、その想いは明示されない。アニーはこのあと、森の中の泉水に金の指輪を落とし、それをまた拾い上げるという奇妙な動作をする。そして、この夜に見るはずの夢へと橋渡しをするのが、水、つまり

泉と海の連想によるトマス・フッドの詩「ヘーローとレアンドロス」である。
「海の中をどこまでも沈んでいく可哀そうなレアンドロス」を謳った詩を読みながら「僕」は寝入ったのである。

レアンドロスはセイレンの腕に抱かれ、丸い眼をした無言の生き物たち、卵色の植物、褐色のアネモネ、蛋白色のダリアなどに囲まれて沈んでいく。振動する暗緑色の渦となって彼らが沈んでいく、その通りの道の様相の変化を、単調な詩行が詩節ごとに描き出していく。

薄暗い緑の中を下へ さらに下へ [この一行は英語：筆者註]

この緑の水の渦の中をずっと、セイレンは、レアンドロスが息絶えていくさまをその眼に映し、半透明の泡でその胸を包み、意識のない恋人に接吻をしながら進む。恋人の唇の上ではヘーローの名がいくつもの大きな真珠となって消えていく。やがて海の草原の幻想的な底に着き、(……)

(p.27 / p.10)

幻想的な光景とともに、神話に基づくこの詩が何かの象徴として呈示されているのは明らかである。神話では、恋人ヘーローの掲げる灯を目当てに毎晩、ヘレスポントス海峡を泳ぎ渡っていたレアンドロスが嵐で溺死、それをセイレンが抱き寄せて一緒に海底へと沈んでいく。アニーが口走った「緑の闇」と詩の「薄暗い緑」、さらに指輪も英雄も水の中を沈んでいく、といった連想が「水」と共に働いたのであろうか。この後で見た夢が、水底に着いた赤ん坊の「僕」から始まるのである。

何の前触れもなく突然、僕は井戸の底にいた。少なくとも、壁、高く狭い壁と思えるものに囲まれた水の底にいた。そして透明な水の絶え間ない流れの中でもがき続けている自分が見えていた。それは、意思がはたらく現実の生活ではたえようのない、夢特有の責め苦の一つである、動けずにもがいているという状態だった。このとき僕はまさに死の間近にいた。

(p.28 / pp.10-11)

この夢がきっかけで、語り手は幼年時代の記憶をたどろうとするが、何も思い出せない。日々の関心事となったこの夢の描写が次のように断片的に続けられることになる。

さてそれから、井戸の開口部に目を上げると、荒れ模様の空を背景にかがみこんだ女の顔、同時に恐怖にかられてともかく逃げ出そうとする動作がおぼろげに見えた。(p.29 / p.13)

[次にもう一人別の女性が目の前に現れ]水に映った影だけから判断したのだが、つまり、むき出しの腕が水から出てきて、それによって救出されたようなのだ。(……) 僕を救ってくれた女性は、僕の理解できない言葉で話しながら僕を抱きしめて、灯りに照らされた通りや河岸を通して連れ帰ってくれた。(p.29 / p.15) ([]内は筆者による補足。傍点は原文イタリック。以下同様)

この奇妙な夢は、やがて成長して孤児院を出た「僕」のもとに後見人がそれまで預かっていた大きな荷物がオランダから届き、その中の大量の古い書類を調べた結果、実際の出来事だったことが証明される。すでにテキスト冒頭から明かされていたように、自分がオランダの古い家柄の出であることも明らかになる。ユトレヒトの母からジャワ島にいた父への1862年9月17日付のオランダ語の手紙には、「僕」が4か月と9日の時に庭の井戸に落ち、まず女中のサールチェが見つけて叫び、次には母が来て水の中から「僕」を抱き上げて救ったことが綴られていたのである。手紙の日付が正しいこと、またこの日に実際雷雨だったことを当時の『ロッテルダム通信』で確認できたという。こうしてこの夢は、「僕」の潜在意識、記憶によるものだったことが科学的・実証的に証明されたかに見えた。が、果たしてそうだろうか。

もうひとつ、夢の中に出てきた「風車」にも注目しよう。「奇妙な夢」の中では、本来聞こえないとされる夢の「音」、つまり女中の叫び声と、女性の話しかける声が聞こえたという。また本来見えないはずの、夢のストーリーとは無関係な風景、つまり背景にすぎない嵐の空や家々の様子、高い木々、そして

2つの巨大な「風車」が悪夢のように迫ってきていたというのである。

それはおびえた人間が見るような光景だった。ときおり月が顔をのぞかせる荒れ模様の空、河岸と黒い水を湛える運河、激しく揺れる年老いた木々の隙間、荒くれ者の腕のように立ちはだかる跳ね橋、天空に滑車を取りつけた切妻造りの小さな家々、カンテラをつけた無数の小舟、しかしとりわけ（……）二つの黒い風車があった。一つは巨大な動かぬ翼を持ち、もう一つは少し後ろにあって、簡素で陰鬱、むき出しになっていて曖昧な形で、翼もなかった。（……）（pp.30-31 / pp.16-17）

出自を知ったのちに「僕」は実際にユトレヒトに赴いて、同じ光景を見出すという衝撃的な経験をする。風車は夢の中と同様、不吉な街と森を威圧し「その上方で二つの風車は、どっしりとした翼から僕への悲痛な合図を送りながら回っていた。こんなにも長い年月を経て辛抱強く僕を待ち続けていたのだ。」（p.34 / p.24）その後、「現実の」風車の一つの不自然な高さはあとから新しく煉瓦を積み足したと思われること、また二つとも翼があるのは、20年ほど前に復旧されたいらしいこと、として解決される。

こうして「自分史探求の物語」は終わるが、しかしいくつかの疑問や謎がそのまま残されたという印象が残る。なぜだろうか。それはどんなものだろうか。例えばエピソードとして引用されたトマス・ド・クインシーの一節がある。

少なくともこれだけは確かだ、心にとって忘れることは不可能なのだ。

Of this at least I feel assured that there is not such things as *forgetting* possible to the mind. Thomas de QUINCEY

註はなく、このあとテキスト内にクインシーの名が出てくることもない。出典を確認してみると、これは『阿片常用者の告白』第二部＜阿片の苦痛＞中、夢についての考察の一文であった。前後を含めて引用しておく。

現に近代の書物の中でこれと全く同じ事が二度までも主張されているのを見たが、そこには私が真実だと確信する言葉が書き添えてあった。すなわち聖書中の恐るべき記録の書は、実は各個人の心そのものであると。少なくとも、忘れることなど心には出来ぬ、と私は信じている。数知れぬ、偶然の出来事が、われわれの現在の意識と心に刻まれた密かな銘刻の間に帳を介在させるかも知れぬ、いや必ずや介在させるであろう⁶。（傍点は原文イタリック、下線は筆者による強調。）

「これと全く同じ事」とは何か？引用文の少し前に、そのエピソードが記述されている。

嘗て私の近親者[原注：おそらくクインシーの母]が話してくれたところに依ると、彼女は子供の時、河に落ち、際どい時に助けられ、危うく命を取り止めたのであったが、その瞬間、自分の全生涯が極く些細な出来事に至るまで、まるで鏡に映るが如く、同時に目の前に並ぶのを見たという⁷。（下線は筆者による）

同じエピソードが別所でもさらに詳しく語られている（p.133）。これらの引用から、「夢の研究」がド・クインシーの強い影響下で書かれたものであったことがわかる。マーテルランクの仕事用のメモ⁸には1886年7月9日付で「*Confession of an English opium-eater*を読む」とある。「夢の研究」執筆に係るメモはその直前の6月26日から存在し、ド・クインシーからの引用も数多く見つかるため、「夢の研究」で阿片が使われるのは彼の著作の影響だと考えてよいだろう。ド・クインシーが阿片吸飲に至った事情は『阿片常用者の告白』冒頭部に書かれている。「阿片に関連した事情から想起こしてみても、私が初めてそれを用いたのは、1804年の秋にまで遡らなければならないように思う。その季節、私は倫敦にいた。大学入試以来初めての倫敦訪問であった。[突然歯痛に襲われて]偶然、大学の知人に出会った、彼は阿片を勧めた。阿片！想像を絶する快楽と苦痛とを喚び起こす恐るべき力！⁹」遠い街で学校の

友人に誘われて、という状況の類似にも影響が見て取れる。ただ、「夢の研究」では阿片による快樂も苦痛にも言及がなく、単に夢の誘発剤として使われただけのようにも思われる。W.K夫人宅への滞在後に「僕」が阿片から離れたのかどうかは分からず、以後その話題はなくなるのである。

鏡の比喻と、死の間際にそれに映し出される全生涯の記憶は「夢の研究」に繰り返し現れる重要なモチーフである。次の一節もド・クインシーを直接レフェランスとしていると思われる。「あれは昔読んだ本の記憶だったのだろうか？その本の中で、おぼれた人は死ぬ瞬間に全生涯をごく微細に鏡に映すように振り返るのだと知った。」(p.28 / p.12) 続いて、夢と連結する鏡のさらに別の役割にも次のように言及している。

夢を見ている人の精神は幼い子供とよく似ていて、抽象化する能力がなく、思考はすべてイメージになり、すべての意図は行動に変えられる。そこで僕は、自分が夢に見たものを映し出すその鏡をすぐに手にして、その中を注意深く見始めた。(p.28 / P.12)

ただそこには「ほとんど何も映っていない」ことに「僕」は愕然とする。「一方で、鏡のある一つの角度からだけ、うごめく靄となって半ば消えかかった、色あせたいくつかのぼんやりしたイメージが見えた。」(p.28 / p.12) ここでは死の瞬間にいちどきに過去を振り返るというより、記憶の奥底の曖昧なイメージを表象し呈示してくれるという能動的な役割を鏡は果たしている。さらに次のような「別の世界への入り口」となる鏡は、むしろ幻想的物語の領域に踏み込ませてくれる道具のようだ。「そのうちに僕は寝入った。暖炉の鏡に映し出される海辺に、レアンドロスの詩に出てきた渦巻きが襲い掛かる様子を目にしながら一寝入るまで一。以下はその直後に僕が見た夢だ。」(p.28 / p.10) 鏡が異世界との境界ならば、水面もそれに準ずるイメージであろう。アニーが手を差し入れた泉水とユトレヒトの井戸の水面は繋がり、「僕」は水面(鏡)の反対側の世界からその手を見上げるのである。そうなると水面に映った「まるでガラスの下にあるかのような木々をアニーは緑の闇と呼んだ。」

(p.27 / p.8) と強調された「緑の闇」こそ、「僕」の夢で見た、そして、のちに実際に訪れて確認することになるユトレヒトの街の光景と繋がるのではないか。

ド・クインシーのテキストに関してもう一つ注目しておきたい。同じく夢>の章に記述された、現実と夢の空間感覚の違いについてである。「[阿片によって]空間感覚と、遂には時間間隔も、共に強く影響を受けた。建物や風景、その他の物が、肉眼では知覚しえない程、巨大にその姿を現わした。空間は膨張し拡大して、名状し難い無限の大きさに拡がった¹⁰。」このような空間の拡大は、巨大な風車=塔のイメージとしてマーテルランクのテキストに投影されるだろう。塔についてはピラネージに関する多くのメモも鍵となる。1888年6月30日付の作家のメモでは「黒い風車—(ピラネージ) 木々が育ったので少し高くされた—¹¹」、また直前の6月26日付のメモでは「ピラネージ、[黒い風車について]夢の中の建物、幻覚の建物、終わりのない階段はとりわけロマン主義的想像力に訴える¹²。」と書かれている。ピラネージの繰り返される無限の階段や建物から、塔、風車、そして閉じ込められた娘や王女のイメージの連想がド・クインシーと合わせて利用されたのだと考えられる。「夢の研究」最終部でのユトレヒトの風車小屋に閉じ込められた「水頭症」の少女、それはピラネージやグリム童話から伝わってきた幻想的なものの象徴なのではないか。

マーテルランクのこの時期のメモにはもう1人、フランス人医師アメデー・ドゥシャンプル Amédée Dechambre (1812-1886) の『医学百科事典 *Dictionnaire encyclopédique des sciences médicales*』からも多くの引用がある。この著作で得た知識がド・クインシーと共に「夢の研究」ではほぼそのまま使われたようである¹³。テキスト内では「僕」の語りによる物語が夢の科学的分析を論じるためにしばしば中断される。例えば「灰白質の広大な領域と高名な医者が奇妙な名で呼んでいるもの」という唐突な専門用語の介入において、この高名な医者とはドゥシャンプルのことである。夢に関する議論はこの事典の「眠り *sommeil*」と「夢 *songe*」の項目がほぼ源泉である¹⁴。「夢の研究」は謎の探求の物語と、「夢」の科学研究とが並行してあるいは交互に行われる複層的

なテキストの様相を呈することになるのだ。

しかし、奇妙な夢が現実の原体験であったことを裏付けたはずの母の手紙は、新たな謎を残すことになる。母の手紙の日付によって、「僕」が井戸に落ちたのは4か月と9日の時だったと解明した。しかしその時期の記憶が実際に潜在意識にであれ残るものだろうか。しかも「庭の芝生にいて女中が目を離したすきに」井戸に落ちたと言うが、まだ歩けもしないはずの赤ん坊がどうやって井戸まで行ったのか。またその日は雷雨だったとすれば、なぜ庭にいたのか。「おそらくこの家には温室があったか、庭の一部がオランダ式にガラスで囲んであったのだ」(p.36 / p.26)と「僕」は自分を納得させようとする。しかし、マーテルランクは実はこの井戸のイメージ図を残していて¹⁵、それを見ると、地面から少し高いところに井戸の口があり、4か月の子が入り込むのはどう考えても不可能に見えるのだ。

一見具体的に明確な「事実」の提出こそが、新たな謎を呼び、その解決はなされないままになる。「過去の発見」だけがこの「物語」の重要テーマではどうやらなさそうである。

II W.K夫人とはだれか？

最大の謎として重要に思われるW.K夫人の正体は、テキスト内でついに語られないままである。明らかに何か事情があることを暗示しつつ、その秘密に触れそうになりながら、謎は解かれない。本章ではその意味を問い、また背景を探る試みをしてみたい。まずは夫人に関する記述を引用しておこう。

ウォルターにはW.K夫人という叔母がひとりいて（今は、イニシャルでしか書くことはできない）、ボストン近郊の海に近い瀟洒な別荘に住んでいた。ある晩のこと、彼は叔母の家に僕を連れていく許可を得た。

（……）家に着くと、W.K夫人は見たところ屈託なく僕を迎えてくれた。それにこの時は、僕たちはこの女性の尋常でない仕事のことも妙な目論見のことも知らなかった。この話をお聞きの方々も知らない方がいい。しかも永久に。すでに何日も、母親のようなもてなしに甘えて僕は滞在を延ば

していた。その危険にその時は気づいていなかった。(……)ある晩、お茶の時間の後で、阿片の吸飲者だけが想像できる不可視の微妙なあの陶酔状態に僕はいた。人通りのない道で足音が聞こえてそちらを振り返るように、時々W.K夫人の方へ目を向けていた。(p.26 / pp.7-8)

そのころ——僕はすでに陰鬱な孤児院を出ていた。またその後のW.K夫人に関することはすべて沈黙を守りたいのだが——そのころ、孤児院の院長からの転送で、僕はオランダから大きな荷物を受け取った。(p.32 / pp.19-20)

W.K夫人が何者なのか、「危険」とは何か、なぜ名前が隠されるのか、僕との関係は、といったことが、いずれは明かされると期待されるのだが、結局手がかりとなる記述は「今は言えない」「永久に言えない」と、思わせぶりに「僕」の手の内にとどめられてしまう。語られなかったテキスト外の解釈をここでは試みておきたい。まずW.K夫人の仕事は何か？ マーテルランク自身のメモでも「彼女の母の異常な仕事」としか書かれていないのだが、作家のメモに付された編者の註が唯一、解釈の拠り所となろう。「仕事というのは、テレパシー、つまり降霊術だと想像できよう。おそらく、アニーは罪のない（知らずに）道具となり、そして一連の連想、想起を呼び覚ますはずの動作をさせられたのだと理解すべきだろう¹⁶。」この仮説に寄り添えば、アニーの所作と重ねて「僕」の母が降霊されて見え、潜在意識を刺激してそれが夢の中で幼少時の記憶として蘇ったのだいう、とりあえずの説明はつく。夢についての議論でも「僕」はテレパシーに言及しているではないか。「僕が言いたいのは、精神の交感とかあらゆる知能の相互内観、つまり以心伝心とでも呼べるもののことだ。それは、どんな魂でも、決まった時間に通信したいと思う別の精神といつでもどこでもつないでくれるだろう。」(p.29 / p.14) また結末部で「母」の肖像画に関する情報を「バルフォー・ステュワート氏、心靈研究学会(Society of psychical inquiries) 会長、ロンドン、ストランド、キャサリン通り75番地」(p.36 / p.27) に送って下さいという読者への唐突な呼びかけは、「僕」が「今」でも降霊術に強い関心を抱き続けている証拠となる。

ここで、この学会について確認しておきたい。会長名や住所まで明記してあるこの組織は、当時も現在でも実在している。正確な名称はSociety for Psychical Research (SPR) で1882年に設立され、2代目の会長がBalfour Stewart (1885-87) であった¹⁷。スコットランド人物理学者で、マンチェスターのオウエンハム大学教授であった。住所の正しさまでは確認できなかったが、ロンドンのこの通りは実在する。学会の名称と細部の相違については、おそらくマーテルランクがフランス語の«Société des recherches psychiques» (1888年7月16日のメモ) を自分で英語に翻訳したからだと考えられる¹⁸。フィクション性を維持するために故意に名称を変えたのではという推測は、会長名をStewardと綴ってしまっているというわずかな間違いから、否定できるだろう。さらに、作家は会長とは知己でなく、フランス語の書籍かメディアによって情報を得たにすぎないこともわかる。1880年代にはアメリカでも米国心霊現象研究協会 (ASPR) が設立され、1889年にはロンドンのSPRの支部になる。つまり「夢の研究」執筆当時、「心霊現象」が英米である程度の流行をみていたのである。ただしこの学会の目的は心霊研究（降霊術の実践や神智学）とは異なり、テレパシー、催眠術、霊媒、幽霊、降霊術に関係した心霊現象や、これらの現象の歴史を学び、目的は「心霊現象や超常現象の真相を究明するための科学研究を促進する」というものだった。そのために、当時しばしば社会を賑わせた異常現象や、降霊術師のトリックを暴く活動が主体になっていったとも言われる。「僕」が助力を頼んでいたのはそのような組織だったのである。

W.K夫人と「僕」の関係を次に考えてみたい。この点についても管見の限り、作家のメモにも従来の研究にも明確な答えは書かれていない。ただA.ゴンザレス＝サルヴァドールの以下の示唆は推理の手がかりになりそうである。「[母親のようなもてなしについて]ウォルターが女たちの世界に[僕を]導き入れ、アニーが夢の世界への手ほどきをしたのと同じように、W.K夫人は彼（＝僕）の不幸（mal）を予告し、また<人通りのない道>で<足音が聞こえてそちらを振り返るように>彼が振り返る女性であること。また、名前、とくに姓を隠しているが、語り手の父の名も秘密のままである¹⁹。」ゴンザレスは続け

て、こうして謎は語られないままのテキストになっていると結論づけているだけである。「僕」の未来の「不幸」も過去も知っている女性、父の名と関係するという示唆から推測すれば、W.K夫人は要するに「僕」の継母、つまり父の第二の妻であり、アニーは異母妹である、と考えてはどうだろうか。そうすると様々な暗示の説明がつくのである。この前提でテキストを読み直してみると、「謎」のいくつかは解明していくと思われる。

父はジャワ島で「僕がまだ2歳にもなっていないときに」亡くなった。以下は推測である。その直前までに、W.K夫人との間に1人娘のアニーをもうけていたのだ。母は「僕」とユトレヒトで暮らし、父の死後「幾月もたたないうちに亡くなった。」その後僕がアメリカに送られたのは、W.K夫人とのつながりによるのである。おそらく父の遺産相続の問題で「僕」の出自は「悪意によって」抹消され孤児院に入れられた。夫人の甥にあたるウォルターもまた同じ孤児院に入れられたが、彼は叔母の何らかの仕打ちについて知っていたのだろう。なぜなら「ウォルターの身に起こったような避けえないトラブルは例外として」(p.32 / p.20)、家族や前歴については孤児たちには内緒にされていたからだ。「無二の親友」となった「ふさがちな友」はおそらくW.K夫人に頼まれて「僕」を別荘に連れて行く。そこにはアニーがいて、彼女を霊媒として「僕」にユトレヒトの井戸の事故と母の姿を再現させる。なぜか？アニーの命が消えそうであることは明らかで、「僕」はその代わりに霊媒者として引き取られようとしていたのではないか？「すでに何日も」滞在しているその期間は、複数の手がかりから計算できる。後に発見される母の手紙の日付は1862年9月17日で、その時「僕」は4か月と9日であった。誕生日は1862年5月8日だと特定できる。滞在は「18歳になったばかり」のことだとすると、1880年の5月中旬か下旬くらいからであろう。そしてアニーと森へ行ったのは「10月」の、(後でわかるが)24日だった。従って滞在はすでに5か月ほどにもなっていたはずだ。孤児院から許可を得たとはいえ友人宅への滞在にしては不自然なほど、つまり身内でもなければ考えられないほど、長い。森での出来事の翌日にアニーは「僕に別れの挨拶をする暇もなく」ニューヘヴンに一足先にいるウォルターに会いに行った。そして「次の火曜日に帰ってくるはずだったが、

もう二度と戻ってこなかった。」(p.31 / p.18)

これらのことをどう解釈すべきだろうか。W.K夫人が、「僕」に関する秘密がアニーに知られるのを恐れたか、あるいは「僕」との急接近に近親相姦の危険を感じて遠ざけたのか。間もなくアニーが亡くなったであろうことも、暗示されるが明記はされない。「僕」の手紙が返送されてきたこと、そして次の一節が手がかりである。

ああ、おそらく純真無垢だったアニー！この時は悲惨な運命について何も知らなかった。(……)それとも何より、アニーの旅立ちが迫っていたことだろうか？帰ってくることはないとすでにわかっていた旅立ちなのだ。黒手袋を嵌めたそのほっそりした手が、起こるかもしれない最悪のことを僕に告げているように思われた。(……)アニーは何かを知っていたのだろうか？わからない、わからない。永久にわからないだろう。今では彼女の上にも無数の土地、幾星霜もの時が積み重なっているのだから。(p.29 / pp.8-9)

「黒い手袋」はマーテルランクにより「闇の[黒い]手 mains de ténébres」とのメモ(1888年7月7日付)があり、近づく死の象徴だとされる。ニューヘヴンで彼女はウォルターに看取られたのだろうか。意味ありげに詳細な時間まで示して、いったん手紙が受け取られたことが示される。「1880年10月15日朝11時、ボストンの消印になっている。ニューヘヴンでの受け取りについては、湿ってにじんだスタンプがこう示している——ニューヘヴン波止場、1880年10月25日午後4時。」(p.32 / p.19)「湿ってにじんだ」とわざわざ書いてあるのは、涙のせいで、というごく常套的な描写手段としてとらえられよう。そしてのちにこの手紙を返送してくれたのはおそらくウォルターで、彼はW.K夫人の「味方」ではなく、アニーを救おうとする同じ被害者の側にいたと考えられる。「封筒からはアニーの姓を消したり、手紙の左角を切り取ったりせざるを得なかった。そこには、W.K夫人のフルネームが、ついに恐怖への門は閉ざされたという銘句とともに刻印されていたのだ。その銘句はどうしても

全く説明のつかないものだった。」(p.32 / p.19) 隠したいフルネーム、特に姓は「僕」の父親と同じものであったのか。銘句を書いたのはウォルターしか考えられないが、それが意味するのはアニーの死の暗示であろうか。

ところで「僕」はその後どのようにしてW.K夫人宅をあとにした(できた)のだろう。阿片の誘惑からも(その後、阿片の話題は全くなくなるので)きっぱりと絶って。何かの危険に気づいたのかもしれない。しばらくして「やっと大人になったところにたどり着いた」時に次のことが起こる。

そのころ——僕はすでに陰鬱な孤児院を出ていた。またその後のW.K夫人に関係することはすべて沈黙を守りたいのだが——そのころ、孤児院の院長からの転送で、僕はオランダから大きな荷物を受け取った。中には後見人の細かい複雑な勘定書、未成年者の後見に関する家族会審議の調書、所有地と金利収入の証書、その他大量の様々な古い書類が入っていた。(p.32 / pp.19-20)

「そのころ」に、W.K夫人が亡くなり——過去の財産受領やアニーの死にも関係していたのかもしれない——正式の相続人として「僕」の元に遺産や書類と共に「真実」が届けられたのである。「もっとあとになって初めて、僕はどんな手落ちのせいで、またどんな悪意のせいでマサチューセッツの奥地に捨てられてしまっていたのかを知った」(p.32 / p.20) とあるからだ。その理由こそが「僕」の人生を語る物語において最も重要であり「種明かし」になると思われるのだが、しかし「それについての詳細は今日の話とは何の関係もない」として片づけられてしまうのである。謎解きを続けよう。W.K夫人は、母から父への手紙を目にしたか、あるいは父から聞いて、「僕」が井戸に落ちたことを知っていたのだ。W.K夫人が実は継母だったこと、母を知っている継母によって意図的に変えられた「僕」の人生と、過去の真実の蘇り、関係者の死、といった中心的な「物語」は、背景に、あるいはガラスや鏡の向こう側に押しやられている。テキストの前面ではその幻影の投影と、付随的であるはずの「夢」の分析だけが繰り返られていたのである。

それではアニーの存在の意味は何か? 「僕」とは異母兄妹だと推測したが、ここでは「僕」の母の＜分身＞でもあったことに注目したい。分身であるという根拠は、「僕」がアニーに書いた手紙の中にある。

……ちょうど君の夢を見たんだよ、アニー。だけどなんだか君はとても変だった。まず僕は底なしの井戸の中でおぼれていて、それからとっても年老いた女性がやってきて井戸のなかを覗き込み、両手を挙げて、ひどい訛りの英語で意味不明の言葉を叫んだ。「穴の中にキントが! 穴の中にキントが!」とかそれに似た言葉を。 なんだったんだろう? そのあと、別の女性がやってきた。アニー、君に似た人だったんだ。少なくとも、全体的には君に似た人だった。ただ顔だけはもっとずっと悲しそうだった。それから君、いや彼女は、君が金曜日の夜に泉のところでやったように、井戸に身をかがめて僕を水から引き揚げてくれた。(p.33 / p/18)

実際にアニーと母の顔が似ていたのかは謎のままだが、少なくともアニーの姿を借りて井戸の出来事での動作が再現されたと捉えることはできよう。夢を見た後で前日の「金曜日」を振り返って記述されていた次の箇所を我々は思い出す。

さて、この宵に見た何が、その夜の僕に影響を及ぼしたのだろうか? 菩提樹が映る水を立てたあの大理石の泉盤だったのか? それとも記憶の中では異様な姿になっている木々だったろうか。まるでガラスの下にあるかのような木々をアニーは緑の闇と呼んだ。それとも遠くからは無口な花に見えた、大西洋の上に輝く月か? それとも悲しい未来を暗示するこの森全体か? (……) はたまたそれは、彼女が泉盤の中に落とした金の指輪だったのか? 冷たい水から指輪を拾い上げたとき、彼女はある奇妙な分身を呼びさませたのだ。(p.27 / pp.8-9)

ガラスの向こうの「緑の闇 Verdurous gloom」は、故郷ユトレヒトの光景

なのだ。「異様な姿の木々」「月」「森」は幼児の「僕」がかつて見た原風景そのものではないか。直接の血縁はないという前提に立てば、アニーと母との顔は違っていたかもしれない。しかし、二人のイメージが＜分身＞として重ねられていることは確かで、アニーは「母」の象徴であり「僕」にとっての原風景を蘇生させる媒介であることは間違いない。ゴンザレス＝サルヴァドールは「レアンドロス」の詩の中のセイレンとも照応させ、3人の女性と水（泉水、海、井戸）、落下による溺死のモチーフが繰り返されることを、テキストの進行に沿って抽出している²⁰。それによると、I 森（泉水）・アニーと指輪、II 詩（海）・セイレンとレアンドル、III 夢（井戸）、アニーと“kind”（子供）、IV 幼年時代（井戸）、母と“kind”（子供）、のように、少しずつずらされつつもモチーフの重なりは明らかである。

物語内の時間軸はIV→I→II→IIIとなる。ただし、Iでは「女性」は故意に落ささせたものを水から救い、IIでは「女性」が溺れさせ、さらに水中での死ももたらす。それに対してIII, IVでは「女性」は命を救う者になる。これらのすべてをつないでいるのがアニーである。つまり彼女は死をもたらすものでもあれば、救うものでもあるということになる。

それではウォルターはどうなったのだろうか？ 孤児院で「僕」と親友になったのだが、もっと宿命的な関係があったことがほのめかされている。

（……）その中に苦しんで悲しみに打ちひしがれた子がいて、彼だけが僕の孤独を和らげてくれていた。その懐かしい名前を今でも言えるし、姿もはっきりと胸の中に刻まれている。しかし、すぐあとでわかるだろうが、悲しいわけがあって、ここでその名を明かすことはできない。

（……）僕の無二の親友——ここではウォルターと呼んでおこう、本当の名前に少しは近いから——無二の、このふさがちな友はほぼ同年だった。（p.26 / p.6）

つまり、ウォルターは本当の名前ではないという、その「悲しいわけ」は結局語られることはない。しかし「現在」でも姓さえ隠す必要があるとすれば、

それはW.K夫人と同じものだということではないか。なぜ叔母の家に「僕」を招いたのか、また滞在中に何をしていたのか、いたのかどうかも全く語られない。少なくとも「僕」とほぼ同じ立場にいて、彼もまた「僕」の分身とも見做せる存在である。アニー同様まもなく亡くなったであろうウォルターの生を「僕」は引き受けて、共に「謎」の解明に向かったと考えられるのではないか。

もう1人、マサチューセッツで幼児の「僕」を引き取って育てた叔父の正体も謎に満ちている。

おぼろげに覚えているのは、アメリカの古都セイラムの古い家の中で、並はずれて太った、顔色の悪い、寡黙な清教徒の叔父と向かい合っているところだ。結局この叔父自身の言葉が発せられるのは一言も聞いたことがなく、それ以後二度と会うこともなくて、彼の姿も消えてしまった。記憶に残るのは、年月のせいで緑がかった木造の家にいる彼の巨体のぼんやりした姿のみ。その家は極端に、本当に異様なくらい小さかったので、叔父は太古の生き物のように、家には重すぎ、はみだしそうだった。叔父は、僕が一人で遊んでいた薄暗く湿気の多い庭に面した窓を開けて、そこに一日中寄りかかっていた。」 (p.25 / p.5)

清教徒の叔父、それはイギリスからの移住者であり、それではイギリス人だった「僕」の母の兄か弟ということになろう。新大陸で決して成功せず貧しく暮らし、やがて亡くなったために「僕」は孤児院に引き取られたのだ。何もせずに「太古の生き物のように」一日中窓辺にいたのは、病気だったのだろうか。テキスト冒頭部のこの場面の光景は、最終部のユトレヒトでの、風車の光景と奇妙に呼応している。風車の塔の窓辺には、水頭症で「大きな」顔立ちの少女が一人、窓辺に寄りかかっていたのである。

僕は小高い丘を登った。頂上は明るく開けていた。あの巨大な塔には入り口も開口部もないとわかった。ただ一つだけ、上の方に小さな窓があって、すでに灯りがついていて。しばらく大声で呼んでみたが、返事がな

い。やっと一人の少女の顔が現れた。異常に大きくて不思議な、説明しがたい顔立ちだが、それでもまぎれもなくオランダ人だった。(……) ある農夫の説明でやっとわかったのは、入り口は丘のふもとにあり、風車小屋には粉曳屋が水頭症の孫娘とともに二人だけで住んでいるということだった。(pp.34-35 / p.25)

わざわざ「まぎれもなくオランダ人だった」と書いてあることが、むしろ何か意味ありげに感じられる。セイラムの叔父とのつながりを注意深い読み手には気づかせつつ、あえて、しかし血縁はないということを示唆するという意図だろうか。物語内では直接の関係はないかもしれないこの2つのイメージは、テクストレベルにおいて幼年時代と故郷に戻った「現在」の「僕」とを結びつけ、こうして円環を閉じる役割を果たしていると思われる。

最後に母の肖像画の行方の謎を考えておきたい。ベルギーのロマン主義時代の画家フランソワ＝ジョゼフ・ナヴェ Francois-Joseph Navez (1787-1868) が1859年か60年に描いたと思われる絵の売却受領証が、セイラムに届いた荷物の中にあったという。

その肖像画は財産処分時に12ギルダーで売却された。とにかく肖像画がどうなったかを捜し出すことは僕には極めて重要だと思われる。それが奇妙な不安を和らげてくれるかそれとも裏付けることになるのだ。(pp.35-36 / p.27)

そして読者に向けて、手がかりがあればロンドンの心霊研究学会会長宛てに送ってほしいというのである。なぜそれほど重要なのか。これまでの推論に従えば、その絵は残された親族の元にあり、それがW.K夫人だという可能性もある。顔立ちを知っている夫人が、アニーを通して「僕」に母の姿の幻影を見せたのだとしたらどうか。肖像画が見つければ、母の姿が明らかになると同時に、夫人と「僕」との関係も裏付けられるのだ。ナヴェは実際、肖像画家として当時人気があり多くの作品を描いている。1859～60年頃の女性の肖像画を

見れば、母のイメージ——むしろマーテルランクにとって理想の——を知ることとできよう。

以上のように、時空を超えてのイメージの重なり合いや魂の呼応という、現実世界とは別の不可視の世界の存在を当然のごとくに前提としたこのテキストは、幻想性の領域に踏み込んだものとして、多くの謎と解釈可能性を読者に与えるのである。

III 二重の語り手

「夢の研究」には、さらに言語とテキスト構造レベルでの大きな謎も仕掛けられている。語り手としての「僕」はオランダの古い家柄の出身で、アメリカで育った青年であることはわかった。「僕」は英語で育ち、やがて送られてきた書類や母の手紙を解読するためにオランダ語も学ぶ。しかしそれらを語るテキスト全体はフランス語である。つまり、このテキスト全体を呈示しメタレベルで（背後から）支える別の「語り手」が存在し、それはおそらくベルギー人であるという、多層的なテキスト構造が見られるのである。そのベルギー人とはマーテルランク自身の「自己」の投影に他ならないという印もあちらこちらに刻み込まれているようである。本章ではこういった作家自身の「声」に注目し、その意味するところを探っていきたい。

まず「溺死」のテーマに注目したい。19世紀末ヨーロッパの文学・芸術において、イギリスのラファエル前派、エドガー・ポー、またシェークスピアのオフィーリア像、そしてド・クインシーなどを通して美化、浄化されて、特に美しい娘の溺死は好まれるテーマの一つになっていた。マーテルランクも同じテーマを『マレーヌ姫』『室内』『アグラヴィーヌとセリゼット』などの戯曲で描くことになる。「夢の研究」で溺れるのは若者であり、幼児ではあるが、夢や記憶の中に現れたこのテーマの重要性はこれまで見てきたとおりである。そしてマーテルランク自身も幼少期に溺死しそうになった経験を持つのである。その記憶が影を落とし続けたことは、生涯で繰り返し（主に3回）、その詳細について直接言及していることからわかる。1回目は55歳の時、1918年4月18日付で、水から救助してくれた幼馴染みの友人バルティアへの

手紙、2回目は1936年出版の断章集『砂時計』で、3回目は1949年、87歳での回想録『青い泡—幸福な思い出』である。最後のものは2回目の記述の採録だが、さらに変更も加えていて、80年近くも前の出来事に関する記憶の精確さに我々は驚かされる。この晩年のテキストから、9歳当時の体験の描写を引用しておこう。故郷ヘント近郊の、父の別荘のあるオースタッカーのテルヌーゼン運河でのことだった。

7月のある午後、妹と弟と私は、同い年の友人も一緒に、ふざけて騒いでいた。私は一番年上だった。2、3掻き泳いでから、沈みそうになった。下手というより、流されるのが怖かったからだ。思い切って土手から2メートルほど離れ、大声を上げ、沈んでいった。友だちが助けに駆けつけてくれる。私は彼の足をつかみ、こちらに引き寄せ、無理だと思ってその足を放す。救助者を死の道連れにしても無駄だと、漠然と考えたのだろうか？それはありそうもないことだとしても、私はそう信じている。ともかく傾斜に沿って這い上がり、岸を目指そうと考える。それからすべてが崩れ、消え去り、意識を失い、そのあとは何が起こったかわからない。(……) 父が駆けおりてくる。もっとすばしこい若い大工が父を追い抜く。まだ階段も平坦な場もなかった。大工は運河に飛び込み、私をつかんで岸に連れて行った。意識を取り戻したのはベッドの中で、かなり水を飲んでいたので少し気分が悪かった。でもそれ以外は、状態は良かった²¹。

死を覚悟したこの体験は生涯トラウマとなり、「夢の研究」にもその時の感覚が生かされたのは確かだろう。マーテルランクは弟の一人を溺死で亡くしてもいて、水と死の観念は重要な関心事であり続けた。ただ一方で彼は自分の「溺死」体験を、ある種「幸福な」、そして「幻想的な」ものと捉えているようにも見える。2回目の1949年の記述は幼少期のいたずらや冒険を「幸福な思い出」として語る文脈においてだった。そして覚えているのは「不可思議なきらめき *ruissement prodigieux*」である。これはリュトーも指摘するように、ポジティブなイメージであり最上級の形容と言え、死の経験を通して「水」を

むしろ「不思議な情景の劇場」と捉えているようなのである²²。1918年の手紙でも「目の前に展開する巨大で夢幻的な féériques 水の柱というイメージだけが残っている²³」と書く。想い出が美化され詩的なものに変えられるのはよくあることかもしれないが、マーテルランクにとっての「溺死」の記憶も、このように幻想的なイメージとして残った可能性がある。

この原初体験の最初の「文学化」が「夢の研究」だったのである。「僕」が1862年生まれだという設定も、同じ年に生まれた作家が自らを投影するためと見做せる。もちろん、孤児としてアメリカで育ったオランダ人という「僕」の明らかなフィクション性も同時に保たれる。「溺死体験」についても、作家の実際の経験とは異なる詳細が、創造性を示す徴となる。例えば溺れた時の年齢は大きく異なり、作家は9歳頃、「僕」は4か月と9日である。誕生日も正確には3か月ずれている。マーテルランクは1862年8月9日生まれで、「僕」は1862年5月8日である。溺れた場所は、運河に対して庭の井戸の中。何よりも水から救い出してくれたのは、マーテルランクは男性（友人、父、大工）だったのに対し、「僕」は女性（母）であった。より閉ざされた空間（井戸）で起こる、より夢幻的な出来事、本当にあったことなのか自分では確認できない年齢、そして「母」が救世主となること。井戸はこうして、自己の根源や母体回帰といった、いっそう象徴的なイメージを喚起する舞台装置ともなろう。実体験に沿いつつも明らかな差異を創ること、その操作自体によって、「夢の研究」のテキストは「僕」の回想に重ねて作家自身の存在をも示す、一種の媒体となるのである。

次に、言語の奇妙な錯綜の問題に注目しよう。まず井戸の場面での「叫び声」についてである。アニーと森で過ごしたその夜に見た夢の描写は次のようなものだった。「何の前触れもなく突然、僕は井戸の底にいた。少なくとも、壁、高く狭い壁と思えるものに囲まれた水の底にいた。そして透明な水の絶え間ない流れの中でもがき続けている自分が見えていた。」（p.28 / p.11）このあとしばらく夢や鏡に映る過去の記憶の話が続く。

さてそれから、井戸の開口部に目を上げると、荒れ模様の空を背景にかが

みこんだ女の顔、同時に恐怖にかられてともかく逃げ出そうとする動作がおぼろげに見えた。(……) さて僕があ動作を一瞬見て、そのとたんにそれは消えたのだ。すぐに意味不明の叫び声のようなものが聞こえたはずなのだ。」 (p.29 / p.13)

翌日、夢のことをじっくり考えて、「僕」はアニーの動作とのつながりに気づき、その観点から再び夢の中のことを記すのである。

次に思い出すのは、アニーが泉でやったのと同じような動作で、井戸の底から僕が引き上げられたことだ(……) 僕を救ってくれた女性は、僕の理解できない言葉で話しながら僕を抱きしめて、灯りに照らされた通りや河岸を通して、連れ帰ってくれた。(p.30 / p.15)

ところが翌日にアニーに宛てて書いた手紙では、「意味不明の叫び声のようなもの」は、訛った英語として記されるのである。「まず僕は底なしの井戸の中で溺れていて、それからとっても年老いた女性がやってきて井戸の中を覗き込み、両手を上げて、ひどい訛りの英語で意味不明の言葉を叫んだ、The kind is in the pit! the kind is in the pit! とかそれに似た言葉を。」 (p.33 / p.18) (ここで英語だとされたこの一文を筆者はとりあえず「穴の中にキントが!」と訳しておいた。「カインド」という発音表記はできないはずであることは、後述する。) それから「アニーに似た」第二の女性がやって来て、僕を水から引き揚げってくれた、と続くが、ここでは女性の話す言葉には触れられていない。そして、のちに読むことになる母から父への手紙で、叫び声と、女の呼びかける声はオランダ語だったとわかる。「サールチェ[女中]はすぐに引き上げてやるどころか、私たちのいる窓のところまで来て叫ぶのよ。't kind is in den put! 't kind is in den put! ([続いて括弧内にフランス語訳が示されることで、読者にも意味が明かされる<坊ちゃんが井戸の中に!>と])」 (p.33 / p.21)

初めに英語だと思って書き留めた"kind"[kaind]はオランダ語の"kind"[kint]に

対応するのだろうか。見た夢の記憶から取り出した「音」が、すでにその意味を知っていたかのようにオランダ語での同綴りの単語になっていることは奇異に感じられる。その発音についての説明はどこにもないが、そもそも「僕」は「夢は常に無音だ」と断言しているのである。ちなみにグリェトマンはこの矛盾に関してそれでも一つの解決策として、古英語で例えばハムレットがクロレディアスに言った台詞中にkin[kin]（血縁）という、綴りのごく近い単語があり、オランダ語に発音も近いことを指摘している²⁴。問題は、いずれもがフランス語のテキストとして呈示されることである。英語で書いたアニーへの手紙を「僕」は「英語から文字通りに訳しておこう。どうか翻訳のまずさは許していただきたい。」（p.31 / p.18）と言うが、いったい「僕」は今どこにいて、どんな読み手に向かって語っているのだろうか。ここにはフランス語で書く別の「語り手」が透けて見えるようだ。母の手紙も「オランダ語から直訳しておく」と言うが、英語にではなくフランス語に、であろうか。英語、オランダ語、フランス語のすべてを操る謎の「語り手」、それは結局ベルギー人の語り手ということになりそうである。テキストの背後に潜むこの語り手の介入があると認めれば、他の言語上の問題も解明できそうである。

母の手紙の中で女中サールチュエは「僕」を指して「kind（子供＝坊ちゃん）」と叫ぶが、そのことを伝える母の手紙は「水の中からあの子を引き上げたの。J'ai tiré de l'eau le cher agneau.」である。直訳すれば「可愛い子羊を水から引き上げた」となる。この"agneau"の語には（「夢の研究」中、唯一ここだけに）マーテルランク自身の註があり、「't Schaapie, [以下フランス語で]小さな雌羊、子羊。子供を意味するオランダ語」と説明される。母が手紙に書いて「僕」が読んだのはオランダ語の't Schaapieという単語でしかない。それがフランス語では（つまり「語り手＝ベルギー人」のテキストでは）"agneau"と書かれている。ここで初めて、アニーのかつての動作の謎に我々は思い至る。「（……）はたまたそれは、彼女が泉盤の中に落とした金の指輪だったのか？冷たい水から指輪を拾い上げたとき、彼女はある奇妙な分身を呼びさまさせたのだ。」（pp.8-9）金の指輪とは？なぜここでそれを故意に落とし、また拾い上げたのか？前述した夢の記述の続きももういちど見ておこ

う。「次に思い出すのは、アニーが泉でやったのと同じような動作で、井戸の水から僕が引きあげられたことだ。水に映った影だけから判断したのだが、つまり、むき出しの腕が水から出てきて、それによって救出されたようなのだ。」(p.30 / p.15 下線は筆者による強調)一文全体がイタリック体(翻訳では傍点)で強調されているのは、明らかにそれが重要な意味を持つという読者への目配せである。

指輪はフランス語でanneauだと気づき、アニーと母、泉水と井戸を重ねてみると、一つの謎が解ける²⁵。音の類似、つまり「アニョー(子羊)」と「アノー(指輪)」の連想から、指輪とは井戸に落ちた子羊=子供=僕なのである。アニーがいったん指輪を泉に落とすのは、「子供」を水から引き上げるためののだ。井戸の底にいる「僕」は水面=鏡の反対側から伸びてきた腕を見て、指輪として救い上げられたのだ。これはフランス語という言語レベルでの象徴と連想であり、マーテルランクからの直接のメッセージとしか言いようがない。

指輪というと、「夢の研究」の次作として4年後に発表された短篇「ポリュクラテスの指輪 Anneau de Polycrate」²⁶にも言及しておくべきだろう。タイトルが示すように、ここでは指輪そのものが中心テーマとなり、重要な象徴的意味を持つはずである。ポリュクラテスはギリシャのサモス島の僭主(BC ?-522)で、神話によれば、指輪は幸福をもたらすが、それが長く続くと不安も呼び起こすとされていた。そこでポリュクラテスは運命を味方につけるために指輪を海に投げ捨てる。しかし間もなく、釣った魚から出てきた指輪が彼の元に届けられると、喜びと引き換えに命を落としたという。マーテルランクの短篇は、タイトルが示唆する神話には実は全く触れず、結末も真反対のものになる。語り手=私が泊まった宿屋のとても幸せそうな若夫婦には、年老いた前夫を殺害した過去があるらしいと分かる。愛娘が失踪したのはその罰とも思われたが、結局娘は戻ってきて、親子3人は喜びにむせぶ。「私」は「幸せすぎる」この宿をあとにして話は終わる。正義とは外的・物理的に定義づけられるものではなく、内的なものであるとゴルセーは解釈する²⁷が、他者の計り知れない精神の内奥に「真実」があると示唆するマーテルランクの思想の反映である。いず

れにしても、この短編によっても指輪は宿の娘＝子供の象徴であるとわかる。そして、指輪がもたらすのは「幸福」であり、同時に不安でもあるのだ。

このような言語的連想は、マーテルランクによる読者への知的挑戦ともとれる。付加すれば、フランス語の子羊 agneauには「善意 bonté」の意味もあり、英語のkind（善い＝bon）との意味上のつながりも考えられるだろう²⁸。「僕」の母がイギリス人であったのは、一連の言語的連想の中で、英語の介入も無意味ではないという周到な設定でもあろうか。オランダ語については、「僕」の出自とわかったオランダ（ユトレヒト）と、マーテルランクをとりまく環境であったベルギー・フランドル地方の言語の差異にも注意すべきかもしれない。これに関しては、当時の話し言葉は異なっていたにしても書き言葉はすでに共通のもので、マーテルランク自身が同じ一つの言語と見做していたらしいことがメモからも判断できる²⁹。諸言語の主観的な色彩イメージについての興味深いメモである。「フランス語は白、英語は青緑、ラテン語は輝く金、ドイツ語は泥土と黒、フラマン＝オランダ語は褐色がかっている。」ちなみに子供時代にしばしば過ごし「溺死事件」の舞台でもあったオースタッカーはオランダとの国境からわずか15kmで、土地の話し言葉もかなり近かったようである。

登場人物の名にまつわる史実とフィクションの関係にも、作家の意図が見え隠れする。おそらくW.K夫人と姓は共通するであろう「僕」の父の名は明かされることはなかったが、そもそも設定もされず空白のままだったのではないか。それは次の事実による。植民地ジャワ島ルバックの摂政は当時テキストに記述されたとおりの名前でも実在していた。おそらくマーテルランク自身がアムステルダム『ジャワ通信』や『日刊ニュース』のバックナンバーで摂政に関する記事を読み、その中のエピソードを借りて「父」を創り出したと考えられる。というのも、グリユトマンによると、オランダから派遣された官吏は当時実在し、またジャワ人領主とのいざこざで辞職した（ただし少し前の1856年）人物もいたという。その名はEduard Douwes Dekker、通称Multatuliで、1860年出版の小説にも書かれてよく知られていたという³⁰。「僕」はその息子ということになるが、姓に関する共通性は全くないようである。

名前を持つ他の登場人物たちについてもグリュトマンは興味深い情報を与えてくれる。いずれの姓 (Van Brammen, Van Naslaan) も名 (Saartje, Meeltje) も、いかにも「オランダ風」であり、例外なくすべて19世紀の人気作家ニコラス・ベーツ Nicolaas Beets (通称 Hildebrand) の小話集『カメラ・オブスクーラ』(1839) から採られたものだという³¹。つまり、固有名詞というよりも、オランダ人 (ユトレヒト人) であるという単なる「印」と見做すことができるのである。

「僕」も、そして父も母も名を持たず、結局その存在は空白である。夢で見た母は、本当にいた母のイメージだったのか。手紙に書かれた井戸での出来事とのつながりは本当にあるのか。肖像画の不在が、すべての不在の象徴にも思われてくる。「夢の研究」は、「僕」の語りという媒体、「母」のイメージを通しての、マーテルランクによる思索と読者への直接の語りかけ、そして多言語を行き来する知的挑戦のテキストという性質を強く持っているのである。

IV おわりに

ロイスブルックの著作との出会いから出発し、神秘や魂の内奥との直接交感を、言語芸術により追求する試み——それが「夢の研究」が追及する大きなテーマであった。さらに、テキスト上に残された謎の解釈を通してわかったのは、このテキストそのものが、不可視のもの、語り得ぬものとの対峙の場であり、また背後に広がる大きな「物語」の象徴として、作家から読み手への目配せと知的挑戦の場にもなっているということである。ここには、エッセーから物語へ、というジャンル上の揺れを伴って、まず夢に関する科学的考察の装いを纏いつつ主人公である「僕」の過去を探るというリアリズム性があった。しかし例えばW.K夫人をめぐる謎は、降霊術や分身、あり得ないほど幼い頃の記憶の蘇生といった、幻想性や神秘を前提とせざるを得ない側面であった。それこそが精神の内奥や魂、不可視のもの、未知のものへの強い関心を示すものである。そして事物と魂の照応、不可視の概念の言語化といった、象徴主義的なエクリチュールへの移行の片鱗も見られるのである。テキスト上でのマーテルランク自身の「声」の介入は、民族・言語の多層性を背景としたベルギーのフ

ランス語文学の独自性の反映でもあろう。

「夢の研究」は、以後の戯曲を中心としたマーテルランクの創作活動の原点でありその方向性を確立する重要なテキストであることもわかった。最後に、それらの戯曲において——ベルギー象徴派としての創造活動において——重要な要素となる「ゲルマン性」が、このころからすでに意識されていたことも確認しておきたい。

ベルギーのフランドル地方ヘントの生まれであるマーテルランクは、フランス語で教育を受けフランス語作家として活動するが、故郷はオランダ語を使用する環境であり、常に隣の大国フランスに対しての、フランドル人としてのアイデンティティを意識し続けていた。ロイスブルックの発見が一つの光明となったのもその意識に基づくが、同時にプリミティヴィズム、特に初期フランドル派芸術に共鳴する。物質[実質substance]との直接の接触を感じたからである。それに対してルネサンス期においては、原初的なもの、すなわち真正さや素朴、直接的な感性、自発性、夢などを否定し、知的な豊かさと共に人工的なもの、教条的なもの、合理主義へと向かったとして、これらの「ラテン的なもの」を徹底的に嫌うことになる³²。そして、自らのアイデンティティの拠り所として「ゲルマン性」を選び取るのである。『青いノート』に次のメモがある。「ゲルマン主義は新しい世界の印に思われる。我々の最もよく知られた古代の二つの印がヘレニズムとラテン主義であったように³³。」つまり、「ルネサンス」はもう古く、それに対する「新しい文芸」がゲルマニズムでありプリミティヴィズムの「復興」だという考え方である。イギリスですでに興っていたラファエル前派運動は、従って、同じゲルマニズムに属するものである。「ラファエル前派の目的は、直観であり、本来の本質的な原初の源に立ち返るものである³⁴。」また、フランス人においてはすべてがサロンで起こっている印象があるのに対し「ドイツ人は森の中、イギリス人は庭、フランドル人は家の中³⁵」にいるという。フランドル人については、室内画のイメージや日常生活へのまなざしを肯定的に捉えたのであろう。ラテン、特にフランス人への攻撃は、多言語を理解するベルギー人との比較にも及んでいる。「フランス人には幼年時代 *enfance* が欠けている。ラテン新世代は多言語使用者 *polyglottes* で

はない。ゆえに劣っている³⁶。」断定的な調子には驚くが、幼年期へのまなざしや多言語使用というモチーフが「夢の研究」で使われていた時、フランスへのこのような対抗意識もすでにあったのかもしれない。

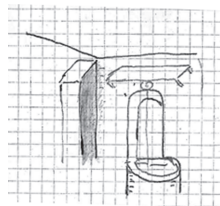
マーテルランクが、そしてベルギー象徴派のフランス語作家の多くが、ゲルマン精神や北方精神に目を向けたのは、このようにラテンと一線を画すためであったと同時に、「新しい芸術」がゲルマンの側にあるという明確な意識に基づいていたことがわかる。マーテルランクの以後の戯曲作品は、ゲルマン世界の神話や文学と通じる様々な要素を用いることになる。それが中世の森、古い塔、井戸、泉、金の指輪などである。さらに共通するのは「水」のテーマだろう。「夢の研究」で泉水、海、井戸が夢や記憶の入り口として重要な役割を果たしていたが、これらのイメージは北欧神話やドイツロマン主義、イギリス由来の水の精（ウンディーネ）や溺死にまつわるモチーフとつながるのである。

「水」は『マレーヌ姫』や一連の戯曲に常に憑りつくことになる。『ベレアスとメリザンド』において、庭の泉水にメリザンドが金の指輪を落すのは、アニーの所作と全く同じである。そして謎の少女メリザンドにとっての水は、そこから来てまた戻っていくはずの、異世界の存在を暗示するものであった³⁷。

のちにマーテルランクはこう書く。「生と死は水と同じように不可分である³⁸。」水とは、彼にとって存在そのものであり、最も大きな神秘、すなわち生と死の両方を象徴するものであり、また超越的な存在すなわち神や宇宙との、交感の媒体でもあったのだ。未知のもの、語り得ぬものとの直接の交感という、生涯にわたる芸術的試みは、神秘や夢を問題化した多くの思想家や作家の影響、またゲルマン性を通しての若き日の模索によってすでに始まっていたのである。東洋への関心も忘れてはならないが、それも含めて1889年からの数年はマーテルランクの知的人生で最も充実した、詩的方向性の確立にとって決定的な時期であったと言えよう。

註

- 1 岩本和子「マーテルランクと絵画—『幼児虐殺』を通してフランドル性をく視る—」in『ベルギーをく視る—テキスト・視覚・聴覚—』(三田順編著)松籟社、2016年、pp.15-42を参照。また「幼児虐殺」の拙訳を『近代』(神戸大学近代発行会)第104号pp.81-94に掲載している。
- 2 Paul Gorceix, «L'Itinéraire de l'homme et de l'écrivain», in Maurice Maeterlinck, *Œuvres I - Le Réveil de l'âme - Poésie & Essais*, Édition établie et commentée par Paul Gorceix, André Versaille éditeur, 2010, p.21.
- 3 現在手に入る版として次を参照した。Ruysbroeck l'Admirable, *L'Ornement des noces spirituelles*, traduit par les Bénédictins de Saint-Paul de Wisques, Préface de M.M.Davy, Éditions universitaires, Pay-Bas / Flandre, 1966.
- 4 Paul Gorceix, *op.cit.*, p.22.
- 5 本論では初出のままのテキストを取めた1985年出版『マーテルランク 夢の心理学序説(1886-1896)』から引用する: Maurice Maeterlinck, «Onirologie», in Maurice Maeterlinck, *Introduction à une psychologie des songes et autres écrits 1886-1896*, Textes réunis et commentés par Stefin Gross, <Archives du Futur>, Éditions Labor, 1985, pp.25-36. 邦訳は次を参照: 岩本和子「夢の研究」in『幻想の坩堝—ベルギー・フランス語幻想短篇集』(岩本和子・三田順編訳)松籟社、2016年、pp.3-27. 引用文については、本文中に仏語/邦訳の順でこれらの版のページ数を記しておく。
- 6 Thomas De Quincey, *Confessions of an English Opium-eater* (1821年『ロンドン・マガジン』初出、1856年改訂増補版出版)引用は次の邦訳を使わせていただいた: トーマス・ド・クインシー/野田秀勝訳『阿片常用者の告白』岩波文庫、岩波書店、2007年、p.153。「近代の書物」とは、スウェーデンボリ『隠れた天国』と、コウルリッジ『文学的自叙伝』。「恐るべき記録の書」とは、ヨハネ黙示録20・12に語られている「生命の書」。
- 7 同書、pp.152-153。
- 8 マーテルランクの当時のメモがまとめて出版されており、執筆時の背景を知るためにはそれを参照する。Maurice Maeterlinck, *Carnets de travail (1881-1890)*, Édition établie et annotée par Fabrice van de Kerckhove, Archive du Futur, AML Éditions / Éditions Labor, 2002, vol.1, p.257 (9-VII-86 [1886年7月9日付])。
- 9 トーマス・ド・クインシー、前掲書、pp.86-87。
- 10 同書、p.152。
- 11 Maurice Maeterlinck, *Carnets de travail*, *op.cit.*, p.546.
- 12 *Ibid.*, p.542.
- 13 *Ibid.*, p.20. (Fabrice van de Kerckhove, «Introduction»).
- 14 *Ibid.*, p.544. (note n°182 par Fabrice van de Kerckhove).
- 15 *Ibid.*, Appendice 7 (図版 ページなし)



- 16 *Ibid.*, p.568 (16-VII-88) .
- 17 Cf. <https://ja.wikipedia.org/wiki/心霊現象研究協会> (最終閲覧日：2017.5.2) .
- 18 Cf. Maurice Maeterlinck, *Carnets de travail. op.cit.*, p.75. (Fabrice van de Kerckhove, «Introduction») .
- 19 Ana Gonzalez-Salvador, «La Pièce qui fait défaut. Lecture d'*Onirologie* de Maeterlinck», in *Textyles (Revue des lettres belges de langue française)*, No10 <Fantastiqueurs>, 1993, p.71.
- 20 *Ibid.*, pp.66-67.
- 21 Maurice Maeterlinck, *Bulles bleues, Souvenirs heureux*, in Maurice Maeterlinck, *Œuvres I, op.cit.*, p.625.
- 22 Christian Lutaud, «Le Motif de la noyade chez Maeterlinck», in *Textyles*, No1 <Lectures de Maeterlinck>, 1985, pp.40-41.
- 23 Cf. *Ibid.*, p.41. (lettre à Baltia, le 18 avril 1918) .
- 24 Rainier Grutman, «Maeterlinck et le “palimpseste” flamand», in *La Littérature française au carrefour des langues et des cultures*, sous la dir. d'Anne-Rosine Delbart (avec la collab. de Sophie Croiset), Cahiers de linguistique. Revue de sociolinguistique et de sociologie de la langue française, No 35 / 1, 2009 [2010], (pp.35-53), (web p.4 / 14[14 ページ中の 4 ページ目]) .
- 25 Cf. *Ibid.*, (p.4 / 14) . 指輪 = 子供のつながりについては以下も参照：Ana Gonzalez-Salvador, «La Pièce qui fait défaut. Lecture d'*Onirologie* de Maeterlinck», *op.cit.*, p.69 / Maurice Maeterlinck, *Carnets de travail. op.cit.*, p.69. (Fabrice van de Kerckhove, «Introduction») .
- 26 Maurice Maeterlinck, «L'Anneau de Polycrate», in Maurice Maeterlinck, *Introduction à une psychologie des songes et autres écrits 1886-1896, op.cit.*, pp.37-43.
- 27 Paul Gorceix, «À propos des “Petits récits”», in Maurice Maeterlinck, *Œuvres I, op.cit.*, p.101.
- 28 Cf. Ana Gonzalez-Salvador, «La Pièce qui fait défaut. Lecture d'*Onirologie* de Maeterlinck», *op.cit.*, p.69.
- 29 Maurice Maeterlinck, *Cahiers bleus*, (édition 1977, p.147, n° 47). Cf. Rainier Grutman, «Maeterlinck et le “palimpseste” flamand», *op.cit.*, (p.6 / 14) .
- 30 Rainier Grutman, *ibid.*, (p.6 / 14) .
- 31 *Ibid.*
- 32 Cf. Paul Gorceix, «Maurice Maeterlinck ou le refus de la théorie», in Maurice Maeterlinck, *Œuvres I, op.cit.*, p.152.
- 33 Maurice Maeterlinck, *Cahiers Bleus*, in Maurice Maeterlinck, *Œuvres I, op.cit.*, p.162.
- 34 *Ibid.*, p.165.
- 35 *Ibid.*, p.175.
- 36 *Ibid.*, p.173.
- 37 Cf. 岩本和子『周縁の文学—ベルギーのフランス語文学にみるナショナリズムの変遷』松籟社、2007年(第4章第1節・第2節 pp.203-254)。
- 38 Maurice Maeterlinck, «L'Autre monde ou le Cadran stellaire», (1942, extraits), in Maurice Maeterlinck, *Œuvres I, op.cit.*, p.244.

要旨

Mystères dans l'«Onirologie» de Maeterlinck : Communication avec le monde inconnu

Kazuko IWAMOTO

L'«Onirologie» de Maurice Maeterlinck, un conte de sa jeunesse, nous laisse intrigués par des mystères que sa lecture, même très attentive, ne dissipe pas. Faut-il le considérer comme un «livre ouvert», dont les interprétations peuvent varier selon la liberté de l'imagination? Nous essaierons d'élucider ses secrets en nous référant aux notes de l'écrivain (*Cahiers de travail* et autres), aux documents pertinents et aux études antérieures. À première vue le texte apparaît comme un conte autobiographique à la recherche du passé oublié du narrateur, qui avait été élevé dans un orphelinat aux États-Unis. Mais après avoir déchiffré, à l'aide de la théorie scientifique du rêve ou du mécanisme cérébral, la signification du rêve mystérieux qui ressuscite le souvenir de l'enfance du narrateur, il subsiste encore des mythes. Qui est par exemple Mme W.K? Quels sont le rôle et le destin d'Annie, peut-être le «double» de la mère morte du narrateur? Ces réflexions nous révèlent l'intérêt de l'auteur pour le mysticisme, l'âme profonde de l'homme et le monde inconnu. S'y ajoute le mystère de la relation entre l'identité du narrateur néerlandais et la voix de Maeterlinck, belge et francophone. L'écrivain cherche à exprimer, par des mots allusifs, ce qui est inexplicable et inconnu. Ce texte nous montre ainsi un éveil de l'âme se dirigeant vers le symbolisme, sous l'influence des auteurs, notamment germaniques, de la fin du siècle.

Keywords : Maeterlinck, «Onirologie», littérature belge, mysticisme, symbolisme

キーワード：マールテルランク、「夢の研究」、ベルギー文学、神秘主義、象徴主義